

Title	戦場としての支那の地勢に就いて(二)
Author(s)	小川, [琢]治
Citation	地球 (1924), 2(5): 554-566
Issue Date	1924-11-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/182774">http://hdl.handle.net/2433/182774</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 戰場としての支那の地勢に就いて(二)

小川 琢 治

## 三

次に三角形の頂點たる北京に就いて述べる。此の地點は揚子江を底邊とした大等脚三角形と黃河を底邊とした小三角形に對して共通頂點となつてゐることが地理的位置の最も顯著な事實である。

第一の底邊たる揚子江の河道は有史以來餘り大きな變化はない様で、後世の禹貢研究家が三江とか九江といふ問題を論ずるに當て頗る大きな河口の移動を認めんとする傾向を示してゐるが、支那の儒家なるものは先入主となつて、一方では夏書禹貢なるものを眞に孔子の手で整頓した夏后時代の古文獻としながら、一方ではその九州中の揚州なるものがそんな遠い昔に判然と知れてゐた筈のないうことには注意しないといふ根本的誤謬があつて、殆ど一考するだけの價值もない。之に反して黃河の河道は三代の頃から現今に至るまでに實に大きな變遷を経たのである。従つて此の小さい三角形は一定の等脚三角形を成さないで或る時は淮水の河口に合したこともあつて、今の京漢線黃河鐵橋の邊を頂點とした低い等脚三角形を成して其の一脚邊が今の淤黃河即ち最近移動前の河道に沿ひ

他の一側邊は京漢線に沿ふて引ける。而して最古即ち周以前の河道は殆ど之に並走して大行山の東麓に接近してゐたこともあつた。

此の世界に他に比類のない河道の大移動の起るのを説明せんとして、リヒトホーフエンは黃河が大平野に出る處から一の廣大な扇狀冲積地を作つて河道が放射狀に其上に出來てゐるものと考へたのである。是は一寸と面白い考説なる如くに見えるが、派流が放射狀を成すのから全く勾配を無視して想像したもので、現實の性質は我々の扇狀冲積地といふ概念の基礎を成す所の鈍頂の圓錐面ではなくして勾配は零に近い。渤海灣と揚子江河口との間の海面が深く大行山麓まで續いて山東山地が島嶼を成した大平野の埋立てられる以前に溯れば、黃河の出口には無論三角洲の水底に作る鈍頂圓錐面は出來たに相違あるまいが、既に埋立てられた後には殆ど平面の上を流れるので氾濫と共に河床と其の兩側の地盤を高めて堤の如くなつて、大氾濫が來れば河道を棄て、其側邊の低部を流れるといふ順序で次第に平野の上に新河道を作つたものである。加之ならず上古時代に藪澤と呼ばれた沮洳地の如きも黃土成生の原因たる埃土の集積作用が間斷なく行れてゐるのであるから、單に山間から土砂礫が排積堆を作る如き流水の作用のみで此の大平野が出來たのではないことも明かな事實である。故に鈍圓錐面を自由に放射狀に流れると考へては大に實際に違つて來る。

今此の河道の變遷を詳説する暇はないが、戰場としての北京平野を考へるには此の小三角形の部

分の變遷を知らねばならぬから左に一言する。周以前には多分今の道口鎮廣平鉅鹿の邊を経て一部は漳河（今天津に至る運河を通ず）天津附近の河口に達したと想像され、寧晋泊白陽淀三角淀の如きものは當時の河道附近沼澤地の遺物と認められる。此時から戰國までの間に大に移動して、更に東々北の方向に轉じて流れ、趙の都邯鄲は之に近い形勝の地であつて、燕は此の河道の北に在つて水を隔て、齊に對してゐたのである。七國中燕は最も小さく獨立して覇を稱するには足らぬので、蘇秦が先づ文侯に説ひて六國同盟して秦を東から包圍する合縱の策を立てさせた。燕が僅かに獨立を維持し得たのは東北の背面に在る遼東即ち今の南滿洲を開拓して古朝鮮の北部に及んだ爲めであつた。兩漢に及んでも今の北京近傍は未だ餘り重要な地位と認められず、唐の安祿山が此に據つて今の遼西及び内蒙古東部の諸胡族を率いて中原に進出し、續いて奚契丹女真などが強大な遼金の國を興して、此に出て初めて大平野を控制するに至つた。此の間に河道は遙かに南に走り今の直隸省及び山東省の北部は全く河北に屬することになつたのが、大に地理的位置の重を加へる要因ともなつた。之を換言すれば北京を頂點とする小三角形が餘程大きくなつたのに伴つてゐるのである。

蒙古が元國を建て都を北京に置いてから彌大廣間正面床の間となつて、明が元に代つて後之を重要視して太祖の弟燕王を置き、それが國を纂ふてから、そのまゝ居すわつて北京を首府とし、元朝以來今日まで六百六十年間支那全部の首府となつた。安祿山以前は漢人が此に割據しても何時も大

兵の攻撃に遇つて滅亡したが、此の時以後北方から此處へ出たものは南から攻めることが出来ないのに、之に反して明の如く南から來て此地に都を置いたものでは北方の慍悍な民族の侵入を受ける危険が絶えずあつた。明の正統帝英宗が也先の捕虜となつたのは其の最も著しい實例である。北京の南に對し有利でありながら北に對して不利なるには地理的の理由があつて、今回の奉直戦争の如き場合では歴史上では多くは北から侵入するものが勝つた徑路を示してゐるといへる。

#### 四

大平野の西邊を限る山地は黃河鐵橋の北衛輝府から正定府に至る間に山西臺地（古生層）の東端が大行山となつて障壁の如く聳立して北走し、此處に至つて今正太線を通する昔から有名な井陘口の通路を開き、其の北では地勢一變して北嶽恒山及び五臺山等の海拔三千米を超えた高峰を戴いた片麻岩結晶片岩の山骨を成した山嶽が東北東に走つて、八達嶺（居庸關）即ちリヒトホーフエンの所謂南口山脈を越えて遼西に連るものである。北京平地は此の山地の間に灣入し、其の西の山地は總稱を缺くから今試に雁門山脈と呼び、其の東の山地も蘄山と呼んで區別して置く。此の蘄山は大平野の北に當り遼西山地の西南邊に開析されて箇々の小地壘の蟠踞するものに過ぎぬ。

主要なる溪谷は五臺山から出て井陘の北を経て正定府（昔の常山郡）の傍を過ぎて寧晋泊の方に向ふ滹沱河が其の一で、北京平地には山西大同府から流れ出る桑乾河が八達嶺の西を破つて峽谷を作

つて南流して北京の西蘆溝に出て白河となるもの其の二で、東南流して天津を経て滹沱河を合せて渤海灣に注ぎ、尙ほ北京の東に遙かに小さい潮河が古北口から平地に出て密雲順義兩縣を経て蘆臺の近傍で津奉線を横つて海に注ぎ、更に山地の間に峽谷を成した灤河が遠く蒙古高原の多倫諾爾（喇嘛廟）から發源して、興安嶺の西南端を横つて清朝の御獵地となつてゐた圍場を流れ熱河（承德府）の南を経て灤州で鐵道を横つて海に注ぐ。蘆山の東北に連つた遼西山地の溪谷は此の灤河と錦州の東の義州に流れ出る大凌河の作つた東北西南の地溝谷 Rift Valleys と更に其の北に之に並走する西遼河に東北流する錫爾哈河及び其の支流がある。

北京の戰略地理學上の位置を考察するに當つて第一に注意されるのは此の如く北に山地を控へて南に大平野に臨むことで、正定府が其の右手の如く、山西汾河平地の太原府から來るものも開封府から來るものも、共に此處で喰ひ止められる。故に秦末韓信が滎王歇を常山に攻めるに當つて、最も畏れたのは井陘口を塞がれることであつた。保定は其の第二の要地で大同府から倒馬關を経て平地に出るものを扼し、涿洲が第三で同じく紫荆關から出るものを扼し得るのである。天津臨榆即ち山海關は之に對して左腕左手に當り、運河及び津浦線に沿ひ北進するものは天津で喰ひ止め、遼西山地の東南邊を成した狭い海岸平地に沿ひ西南に侵入するものに對しては臨榆の位置が最も重要で長城の起點が此處に在つて、天下第一關の名は空しくないのである。

若し南方から大きな兵力を以て北京を目標として前進し來るものとすれば、之に對する北軍の第一防禦線は正定河間兩府と滄州を連ねて海岸岐口に達する三角形の底邊を成す一線であつて、其中でも正定の得喪が非常に重大である。次の防禦線は保定、雄縣、霸州、天津、大沽を連ねた第二の底邊に相當する一線で示され、此の方は南に白洋淀、三角淀を控へて防禦に便な天然の地形を成し宋が遼(契丹)金(女眞)の南侵を喰ひ止めるに此の渾水を利用せんと試みた歴史もある。

若し夫れ現在又は近い未來に南北に二分して雄を爭ふ場合があるとし、直隸側が陝西河南山東を提携して江北江西安徽江蘇以南の諸省の兵を引受けて大戰争をなすこともあらば、戰略上の關係は一層大きく洛陽開封濟南青島を連ねた一線が第一の防禦線となり、嶧縣沂州で徐州と對し、山東山地が左翼を保護する役に立ち、南軍の右翼は沂州から沂水縣を経て青州に至る山地を兩分した交通線と、同じく沂州から莒州諸城縣を経て膠州青島に達するものと、又た直ちに泰山の南麓泰安に進み津浦線に沿ふて北進する中央軍と泰安で連絡してくるから、膠濟線が此の北軍左翼全體を連絡する最も便利な戰略線である。而して濟南が此の場合南軍の策動の第一の目標たるべきで、其の守備が出来ねば黃河下流は防禦線たる價值を失ひ、左臂の麻痺を來すのである。故に沂州を陥れ、次に膠州濰縣青州を陥れて、濟南をも占領するに非ざれば南軍は直隸省の東部に侵入することが出来ぬ。又た右翼では漢口襄陽から侵入する南軍の左翼を光州と淮水に沿ふた信陽南陽で防いだ後に、汝

水に沿ふた襄城から陳州で防ぎ、次に洛陽開封間の汴洛線が非常に有効に働くことになる。

此等の戦争を経過して初めて南軍が黄河線上に進出する譯で、然る後に前に述べた第二第三の防禦線に退嬰して更に戦争を續け得る。故に南方から北進して北京に肉薄することは實に容易でない。然れども清朝の綱紀がゆるんだ後長髮賊が廣東廣西の方面から起つた時には容易に湖南に侵入して武昌に出で、無人の地を行く如く河北まで前進した實例があるから、守り易い防禦線が必しも守られないのが常習で、戰略地理學上から考へた此の如き戦争の經過は必しも規則正しく行はれるや否やを豫測し難い。

## 五

背面の山地から北京平地に侵出するものに對しては今南方から大平野を北進するものに對して考察したとは大に趣を異にし、前者に對しては寧ろ不利な戦争の經過を見ることが多い。雁門山脈の北側即ち代上谷(今の大同宣化兩府)から北京に侵入した歴史上の例は少くない。此の西北に對する咽喉の要地は居庸關であつて、是が六朝時代に所謂大行の第八軍都陞である。

序に大行山の戰略上の考察に重要な八陞を列擧する。陞とは爾雅に釋いて連山の中斷したものが、沁水に沿ひ陽城平陽に達して汾河の下流に通ずるもの、第二太行陞は同府の正北に在つて今澤



州まで鐵道のある山西河南間の要路に當り、第三白陁は衛輝府の西北に在つて、濁漳水の水源地に通じ斜に西北汾河の中流に達する捷徑たるもの、第四潞口陁は磁州を流るゝ潞水にあつて、彰德府即ち古の鄴都から西北に清漳水の水源地に通じ斜に太原府に達するもの、第五井陘は述べたものはから北に居庸關即ち軍都陁までの間に尙ほ第六飛狐陁は定州から倒馬關を経て大同府に出る要路に當り、第七蒲陰陁は即ち紫荆關で、保定府から蔚州に通じ、西北は大同府北は宣化府に達するものである。

居庸關を詳記した古いものは北魏酈道元の水經注に居庸關は上谷沮陽の東南六十里に在り、軍都は居庸の南に在り、谷を絶ち石を累ね、塘を崇かくし壁を峻にし、山岫層深にして、側道褊狹なり林鄣邃險にして路才かに軌を容るといふ有名な文句である。是によれば軍都は多分今の南口に當つてゐる。長城の内側の支線は其の北の八達嶺に在つて此に北口が設けられ岔道口<sup>チヤウダウ</sup>に出て、此から西北に向ひ明英宗の捕虜となつた土木堡を経て桑乾河の支流洋河の横谷に沿ひ、宣化府を経て外長城の張家口に達し庫倫に通すべく、又た別に岔道口から北に向ひ獨石口に達し多倫諾爾の方にも通するのである。

居庸關の爭奪が北京の死命を制するに足るから西北から來るものゝ必爭の地であつて、歴史上には種々の例がある。其の中最も著しい一は宋の宣和四年（一一二二）金が遼の燕京を取らんとして此

處を攻めた時で、崖の石が崩れて成卒の壓死したので容易に之を陥れて直に今の北京に入つた。之に反して嘉定二年（一二〇九）に蒙古が金を攻める時には金兵が固く居庸關を守つて拒いでゐて入ることが出来なんだ。蒙古の大軍は紫荆關から出て先づ涿易二州を抜いて、南口から居庸關を攻めて之を破つたとも、又た關の東の方に間道が松林中に在つて札八兒が枚を啣んで夜此の谷から出て南口に奇襲を試みたので、金兵が駭いて潰つたともいふ。尙ほ鐵木眞が嘉定六年に燕京に攻め込んだ時には大口といふ方から入つたこともある。

西遼河の流域に屬する遼西山地は漢代に烏桓民族の占居した地方で、晉代に至つて慕容氏が割據し、六朝末以後契丹（遼）が此を根據として南侵し、女眞民族（金清）の遼東に據るものが先づ此の地方を占領して北京を攻略した歴史があつて、北京中央政府の鬼門に當つてゐる。

明の末路は流賊の天下を横行するものが起つたので殆んど内から潰へたのであつて、滿州兵の爲めに直接北京を攻め取られたのではない。が此の近い例に於ても遼西の狭い海岸に沿ふて設けた大寧衛の要塞は非常に有効であつたことが著しい。特に崇禎十四年錦州は祖大壽が之を守つて洪承疇の後詰があつて滿洲兵は幾度も撃退され、松山の洪承疇が降つたので十五年に至つて初めて陷落した。

此の戦争で明かなる如く若し遼東と遼西とが別れて、後者が北京政府に直屬の軍隊の駐屯する所

であつたならば、滿洲から西南に向つて行進する軍は必ず先づ錦州に於て喰ひ止められ、之を破つて山海關に達するには相當の時日を要する筈である。然るに現今の政治區劃は清朝の滿洲を根據地として中原に臨む方針である爲めに、此の關外の要衝の地を奉天省に屬せしめ、一昨年張作霖の北京で失敗した際にも此の戰略上重要な地帶を其の手に委ねて、之を中央政府に直屬する軍隊で占領するだけの實力がなかつた。是れ實に奉天軍に最初から山海關を攻撃し得る便を與へたもので、是によつて直隸軍は狹岸平地に於ける戰略上の利益を失して南方に於ける決勝前に奉天軍を最後の關門に迎へて戰ふことゝなつた。

次に考察すべきは遼西山地の戰略地理學上の意義である。此の地方は顧氏の筆を執つた時代には清朝の勃興した際で、意の如く犀利な判斷を明示し能はずして、僅かに明朝までの關外の地理を摘記したに止る。然れども幸に道光年間になつて承德府誌が出てゐるので歴史地理上頗る豊富な材料があり、筆者自から古北口から熱河を経て赤峰に達し、圍場を横つて灤河の上流を窮めて多倫諾爾に出で、張家から北京に還つたことがあるので、此の地方の地勢に就いて大觀することが出来る。

遼西山地の地勢は前に述べた如く雁門山脈と大體走向を同くした北東南西の拆裂線の並走によると思はるゝ構造谷即ち地溝谷によつて開析された准高原と謂ふべきものである。之を構成する岩層は始原片麻岩 アルゴンキア石灰岩、硅砂岩等の諸層、古生代古期の石灰岩、硅岩、板岩等の諸層

が基盤を成し、其の一部に中生代の夾炭層及び石英斑岩の噴出帶が略ぼ地溝の走向に一致して排列してゐる。古い陸面としては浸蝕の進行は案外に遅々たる如く、河流網目の頗る密な壯年期の形態が普通で、從つて抵抗性に富んだ岩石が狹隘な溪谷を作つた處を見る。

最も重要な交通線は大凌河及び青龍河を連ねたものが、海岸に沿ふた柳城の長柵の内側を並走してゐる。此の線上に於て朝陽が大凌河谷の最も開放した溪谷の要地で、慕容氏が割據して燕國を建てた時に龍城の都を置いた處である。此から西南に青龍河谷を下れば、長城の桃林口を経て永平に達し、直ちに瀾州の鐵道線を衝くことが出来る。

第二は之に並走する老哈河の上流から瀾河の東支谷たる瀑河に道じ、喜峰口に達する線で、此の北に在る建昌南の平泉は共に朝陽と共に燕遼の盛時の都會で、又た喜峰口の北には有名な松亭關があり、之を入れば東南は遷安西南は遵化を攻め得る。

第三は西爾哈河源から熱河に達する線で、同じく前二者に並走して、西に折れて承德府(熱河)から瀾平を経て青石嶺を越えて古北口に達し、之を出づれば密雲順義を経て直に北京城の東北隅に到達するのである。

此等の諸線を奉直兩軍の何れかゞ甘く利用するかによつて、戦争の大局を決し得るもので、恰かも日露戦役の第一軍の役割に當るのである。今回の戦争に於て直隸軍が機先を制して早く強大な兵

力を熱河から朝陽に送つて錦州に攻勢に出で、山海關から進出する本軍と策應し得たらば、恐らくは奉天軍をして山海關に肉迫する能はざらしめたであらう。然るに今日までの経過では奉天軍が此の山地内部の第一線を完全に占有し、第二線も或は其手に落ちんとしてゐるらしい。若し冬季の進む前に奉天軍が熱河に達し得たらば事彌重大となつて、北京は風聲鶴唳に驚き人心の恐慌を起して直ちに中央政府が顛覆する如き政變を見るかも知れぬ。

若し又た直隸軍が内から潰亂解體することがなかつたとして、戦局が此の経過を取つて奉天軍に有利に發展したとして、尙ほ其の困しむ所は兵員軍資の補充問題で、今方さに冬季に入らんとする時で十一月には遼西山間の寒氣は日本内地で想像し得ぬものがある。又た兵員の品質が日露戦役に豫後備役兵を繰出してから、攻撃力が鈍つた實例などは霄壤の差があつて、山東邊から募集し來つた苦力に銃器を與へて直に戦場に送られるものが多くなれば、旗色の少し悪い時に踏張りが利かぬのは當然である。故に假令今日まで接手した報導の如く進行するとしても、恐らくは山海關奪取を一期として永平灤州灤河口を連ねた南北に互に一線に前進して此處に冬營に入り、砲火の争は暫く停頓して塹壕中に春を迎へ、其の間に宣傳其の他の支那一流の外交的手練手くだが行はれるのであるまいか。

之に反して直隸軍が首領株の間に完全な協力が出來て、熱河方面に十分の應戦が出來て、山海關

より喜峰口に至る長城に沿ふた戦線を維持しつつ、遼西の第二線に進出して建昌平泉から朝陽を壓迫し得た場合を想像するに、是れ亦た奉天軍が退いて錦州義州朝陽の短い戦線に據つて、直隸軍の東進を喰ひ止めることは必しも困難でなく、兵力の過少なる場合でも戦略上からは敢て絶望とはいへぬ。然れども此の場合に立ち至らば士氣の阻喪が如何なる内部の擾亂を誘致するか豫料し難い。

此の稿を終るまでに疾くも江南の戦局は終結した。孫文北伐軍編制の聲のみ徒らに大きくて、背面から福建を襲ふて、其の北進を牽制し能はぬ爲めに、浙江軍を腹背の挾撃に委ねて脆く潰滅する外なからしめ、直隸側をして南方に全勝せしめた。此の勝負の決定が奉直戦に影響する所が頗る大であつて、兵員物資の北方運送が多少とも出来るので、内線の利益は直隸側に在る譯で、奉天軍の位置は半月間に著しく不利となつた様に想はれる。

之を要するに支那に於ける戦争は單純なる戦略上の問題として見た通りには進行せぬから、我々の述べた所も單に此の機會に支那の一つの地理的考察方法を試みて、地勢の關係を知るの一助とするに止めるに過ぎぬ。(十月廿三日)

本稿の校正が丁らぬ前に今回の奉直戦も熱河から東北に向つて奉天軍の右翼を牽制すべき任務を有する馮玉祥軍が却つて北京を占領し、張宗易軍をして灤河上流から吳佩孚軍の左側面を衝かしめ、戦局の急轉を來したのは南北に於け進行と正反對で我々の所謂鬼門から破れてしまつた。(十一月五日)